

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年3月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.37 「見逃さない目を持つ」

先日、とあるセミナーに参加した時のことです。

私はセミナーに参加する時、最前列に座ることを常としています。ほとんどのセミナー、講演会が後ろの席から埋まっていきます。大学の授業もそうですよね。奥床しい民族性のためか、はたまた快眠のためか？は定かではありませんが…。

以前、セミナーやイベントを企画・実施する企業の担当者に聞いたことですが、セミナー会場の最前列に座った人と最後列に座った人を調査したところ、年収に2倍の格差があったそうです。その話を聞いてから、私は意地でも最前列に陣取るようにしています。

ところが、今回のセミナーはプロジェクター本体が最前列のテーブル上に設置され、スクリーンの位置も高くありません。後ろの人に配慮して前から3列目の位置に座ることにしました。講演が始まり、会場前方部分を暗くして映像が流され始めます。

15分くらい経過した頃でしょうか。遅れて入場してきた男性が最前列まで歩いてきて、プロジェクターの隣に座るではありませんか。後ろの方には充分空席があります。3列目の私でさえ頭を低くして受講していたのに、堂々と構えてる度胸の良さに関心していたところ、突然、携帯電話の呼び出し音が鳴り響きます。すると、その男性が携帯を耳に当てながら、最後尾の出入り口まで歩いていきます。そして数分後、当然のように最前列の席に戻ってきました。私は感心を通り越して呆れてしまいました。

遅刻をしてきた場合、雰囲気を壊さないために出入り口に最も近い席に着くのは常識です。携帯をマナーモードにするのも常識です。公演中に会場を何度も縦断するなんて常識外れも甚だしい。後で分かったことですが、その人物は主催者側の知り合いで、セミナーの常連さんのようでした。あの人物がこれからもセミナーに参加するようなら、私は2度と同団体が主催するセミナーには参加しないでしょう。

私が指摘したいのは、某人物の振る舞いについてではありません。それを許している主催者側の対応です。マナー違反を

犯す人はどこにでもいます。しかし、そうした行為を「相手は常連客だから」と見逃していると、他の客（見込み客）が離れてしまいます。結果、同類の客だけが集うコミュニティが完成します。

以前もお話しましたが、塾内で授業の妨害行為をする生徒を見逃していると、他の真面目な生徒が離れていきます。この時期、新規入塾生が大勢やってくることでしょ。塾の雰囲気に馴染めず、私語を発したり、他の塾生にちょっかいを出す生徒がいるかもしれません。そんな時、教師の対応が問われます。新人だからと大目に見ていると、あなたの塾を信頼して通い続けてくれている生徒を失うことにもなりかねません。

逆の現象も起こります。常連客（継続通塾生）の傍若無振る舞いに、意欲を持って入塾してきた生徒がガッカリすることも避けなければなりません。

要は、日常の規律の問題です。塾生と親しく交流することは大切ですが、師弟の関係を失った人間関係になってはいけません。

この時期、塾が最もバタバタするのは避けられないと多くの塾人が言います。大量の教材が運び込まれ、教室の整理整頓が疎かになっているのも「今の時期は仕方がない」と言います。しかし、だからこそ、他塾との差別化を図るチャンスなのです。

先日、塾を中心顧客とする企業の経営者がしみじみと言っていました。

「当たり前のことを当たり前に行うだけで、この業界は差別化になります。多くの塾経営者が差別化の意味を履き違えて、サービス業の本道から外れているように感じます。」

さあ、塾内を見渡してください。

「今の時期は仕方がない」と、ダンボールが積みっ放しになっていませんか？「今の時期は仕方がない」と、授業の雰囲気が壊れていませんか？

受験も、学年末試験も終わったこの時期に緊張感のある授業をしている塾は、必ず地域から支持されるはずですよ。

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年3月23日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouku.co.jp/>

業界
TOPICS

vol.12 「今年度の新戦略で注意すべきこととは？」

今回は、今年度の新戦略で注意すべきことを、全国主要塾の事例をもとに検証してみたいと思います。(塾名は全て匿名とさせていただきます)

システムでもツールでもなく、人材こそ命

A 塾

「今までのように、お家芸だけ得意な塾では駄目だ。景気が底を打ったというが、まだ二番底もある。名門塾だ、成長塾だと思ってもそれは何にもならない。次期戦略展開のため、基盤となる人材の確保と育成が一番」

B 塾

「ちょっとしたテコ入れならしないほうがよい。限界はすぐにくる。根本的な改革は精神的なものが優先される。企業風土そのものを改善しないと駄目だ。人的資源こそが最大にして最良の塾の遺産なのだ」

C 塾

「公立中高一貫校対策講座が救世主というが、合格実績を高めるよりも、むしろ合格者の数倍も生まれる不合格者をいかに長い期間通塾させるか、それが生き残るための最優先課題だ」

D 塾

「学費値下げに伴い、生徒に負担となる授業時間数削減を行ったが、内容的に生徒指導は掘り下げて、学習内容の定着化と支援体制を充実させた。数値的なものでの納得ではなく、内容について納得してもらい通塾を続けてもらえるか・・・しかし校舎や教師の見栄えも大事だ」

E 塾

「どこの塾で塾長やっていた、また別の塾で校舎長やったり教材づくりをやったりしたという・・・どうでもいいような経歴を並べて中高年が転職に応募してくるが、結局どれだけ子供が好きか、ギャンブルや女性など無駄なことを嫌い、受験指導に集中してくれるかが大事であり、最初から責任ある仕事をやらせて欲しいという人間は書類選考で落第だ」

F 塾

「短期間で実力をつけて欲しいとか、野球とかサッカーやりたいのでアノ学校に合格させてくれとか、色々と注文の多い時代だが、生徒本人の将来の為には、如何に学びの習慣を身につけるか、社会に向けて必要とされる礼儀や態度を理解させるかが大事だ。これは本人だけでなく親とも何度も徹底的に話し合いをしなければならないことなんだ」

鉄砲ではなくタイムマシンの時代に

短期間に成績向上させる「成績保証制度」や志望校合格に導くデジタル・映像ツールなどが大きな流行ですが、その反動か？アナログに回帰する傾向もあります。今後の大きな流れとして、「鉄砲」のような指導ツールではなく、生徒や親に未来の一端を見せたり体験させたりする「シミュレーション」のような進路指導が発達するような気がします。最初は「浦島太郎」でも構いませんが、徐々に自分がすべきことを理解し、納得して学習する、そして目的意識を強く持って志望校合格を目指す・・・そのような本来の姿に塾が回帰していくように思うのです。

未来を読むためには、過去十数年のことを検証してみることも大切です。自塾と周辺で過去どんなことが起きてきたのか、徹底調査する必要があるようです。

歴史に学ぶ。

<時代の流れをつくるひと 大黒屋光太夫>

蝦夷より北、アリューシャン列島に漂着

江戸時代の宝暦元年（1751年）三重県鈴鹿市に生まれた光太夫は、伊勢国白子の港を拠点とした廻船（運搬船）の船頭として活躍していました。天明二年（1782年）紀州藩の困米を積んで江戸に向かう途中、駿河湾沖付近で暴風に遭い漂流しました。帆柱を切り、舵を捨てて漂った光太夫たちは、日付変更線を越え、アリューシャン列島の一つ、アムチトカ島に漂着し、現地人やロシア人たちと交流しました。

ラクスマンとの出会い、そしてペテルスブルクへ

彼らは帰国の願望強く、ロシア語を学習してロシア人と協力して船を造り、五年後に島を脱出してイルクーツクに着きましたが、途中フランスの探検家「レセップス」にも出会いました。イルクーツクで、日本に関心の深かったキリル・ラクスマンと出会い、それとともに多くの協力者を得て、帰国の道を探りますが・・・。

彼らを帰国させないロシアの思惑とは？

北朝鮮の拉致事件を思い出しますが、漂流した彼らはロシア人に対する日本語教育のため、なかなか帰国を許されませんでした。ロシアは将来の日本との交易や外交のため、たまたま訪れた彼らを貴重な日本語教師として手放したくなかったのです。イルクーツクでも、ペテルスブルクでも、彼らは何年もロシア政府への協力を求められるのです。

外交交渉の道具として

彼らが帰国を認められることになった背景には、彼らを帰国させることで、日本との外交交渉や交易の商談をスムーズに運ぼうというロシア政府の思惑があります。キリルの次男アダム・ラクスマンが遣日使節として根室に派遣されるのに伴い、彼らのうちキリスト教の洗礼を受けていない四人が同行しましたが、一人は根室で死亡しました。

ロシアの支配者に謁見した彼らは、江戸で時の將軍家斉

や老中松平定信にも謁見し、漂流後のロシアでの生活について聞き取り調査を受けますが、それは事情聴取というもののというよりも、数十年以上も先に行く見知らぬ異国の世界について、興味深く聞く「大人の紙芝居」のようなものでした。

帰国後の彼らは幕府から居宅を用意してもらい給金も得て、郷里から親族も呼び寄せ、全国の大名や知識人に、將軍に話したのと同じような「大人の紙芝居」を行って謝礼を頂いて、生活の心配もなく比較的自由的暮らしを続けることができました。

時代の大きな流れをつくる人たちがいる

彼らが漂着し、ロシア領内で旅をするときに必ず助けてくれる人たちが存在しました。それは宣教師と商人です。彼らは布教と通商を目的として様々な場所に行くわけで、どこで誰に助けてもらえるかがわかっていたのです。また、それをする中で、彼ら自身も新たな布教やビジネスが開かれたのです。

しかし、キリル・ラクスマンは光太夫たちに対し、同じ人間として献身的な協力を惜しみませんでした。娘と船頭の一人は恋に落ちてもいますが、キリスト教という大きな壁が彼らの精神を束縛します。漂流者たちは、夜明け前、浦島太郎として帰国し、数奇な体験の全てを語れる場もなく歴史の中に消えていったのです。

取材/記事 : 新教育産業監修・月刊私塾界記者 千葉誠一

大黒屋光太夫（だいくくや・こうだゆう 1751～1828）

大黒屋光太夫は、三重県に生まれた船乗りでしたが、1782年、32歳の時に駿河湾沖で遭難し、七ヶ月の漂流を経て、カムチャッカ半島からさらに北のベーリング海に並ぶアリューシャン列島に漂着、先住民や在住ロシア人と交流を深め、日本語教師などを経て、43歳で帰国。十年以上にわたるロシアでの生活が役立ち、その後は当時最高のロシア通として幕府に仕えました。ラクスマンやレザノフの来航などに伴い、ロシア問題解決で活躍したり、各地の大名や学者へのロシア関係の情報教授も盛んに行いました。

江戸時代の漂流船

鎖国の江戸時代には、日本近海を巡る廻船が頻りに就航し、かつ漁をする小型船も波の静かな近海で魚を獲っていました。しかし、少しでも外洋に出ると、海流の流れは速く、多くの船が漂流して破船したり異国に流れついたり、異国船に助けられたりしました。帰国しようとしても、キリスタン禁制をしく幕府によって厳しい取調べを受ける対象となることは明白でしたが、その疑いが晴れると、彼ら漂流経験者は異国事情を知る貴重な存在となりました。まさに江戸時代の「浦島太郎」の一人が、大黒屋光太夫であったのです。

ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。できるだけ対応したいと思っています。ご連絡はこちらまで：magazine@chuoh-kyouku.co.jp